

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

スガノと決別する「土を考える会」

スガノ農機は我が社の株主である。それだけではない。先々代の社長である故菅野祥孝氏が背中を押してくださったことでこの『農業経営者』を創刊できた。経済的にもご支援をいただいていた。しかし、今月号そして来月号に掲載を予定している全国土を考える会役員の座談会を含めて、その内容は現在のスガノに対して弓を引く内容のものになるだろう。僕はスガノ農機の役員人事についてとやかく言える立場にはない。しかし、「全国土を考える会」に関しては別である。

その前身である「北海道土を考える会」は、昭和53年（1978年）に祥孝氏の呼びかけで北海道内の20名の先端的農業経営者が集まり、土と経営を語り合う会を開いた。それがスガノ社員が聞くというのが祥孝氏の目的だった。集まった農家たちは、参加者についての風評は聞いていても、出会い、語り合うのはそれが初めてだった。そして祥孝氏が閉会の挨拶を始めたのを遮って、網走市から参加していた石川武氏が「来年もこの勉強会を続けよう」と呼びかけた。それ

が、以後40年にわたって続く北海道土を考える会の始まりだった。この経過については本誌の17・18号（96年6・8月発行）に掲載されている「我らにとつての『土を考える会』」と題した座談会を読んでいただきたい（本誌のホームページ上で検索すればどなたでもお読みいただける）。毎年7月10日にスガノ農機本社（現・土の館）がある上富良野町で開催される土を考える会には農機メーカー各社も注目した。総会に合わせて土を考える会が主催した最新農業機械の実演検討会には6千人もの農家が集まる大イベントにも発展した。しかし、そうした大規模イベントは土を考える会の本質ではなく「原点回帰」しようということ、その後中止になった。

一方、プラウを始めとする畑作技術体系への認識が低かった府県においては、91年にスガノ農機が「有機物循環農法体験記」の募集を開始し、翌92年に第1回の受賞者である鹿児島県の野中保氏の呼びかけで体験記の表彰者が集う「有機物循環農法研究会」が発足した。初代会長には近藤牧雄氏（愛知県）がなり、農業技術通信社が事務局となった。その研

究会の性格を表す記事が『農業経営者』の39号（99年4月）に掲載されている。九州・沖縄支部のメンバーが北大東島に住む上地勝也氏を訪問した時のことを紹介した「遠くの友が村に勇気を連れてくる」と題した農業経営者ルポである。

そして2010年の12月に北海道土を考える会と有機物循環農法研究会が合併し、「全国土を考える会」が発足する（事務局…スガノ農機・農業技術通信社）。

土を考える会は単なるスガノのユザー会ではない。例えば現在の乾田直播の普及は、土を考える会会員が自ら経営リスクを負いながら、スガノ社員とともに試行錯誤を繰り返してこそ実現したものだ。農業経営者の声に耳を傾け、それをもとに製品開発をし、ともに農業新技術開発に取り組んできたスガノと会員の間にある共感と愛着はどこに行ってしまうのだ。この間のスガノ社員と会員の取り組みをどう思っているのだろうか。新経営陣はその経営者交代を認めさせるために過去を「失われた12年」と評した。それを聞く会員の怒りと失望に気付くべきだ。スガノにとつて会員こそが最大の宣伝メディアであり、営業の同伴者でもあった。スガノは今、それを失おうとしている。